

「豊洲四丁目団地における安全・安心なコミュニティ形成」プロジェクト

代表者	小菅瑠香【教授】(建築学部 建築学科)、山本創太【教授】(デザイン工学部 デザイン工学科)
構成員	中田新(理工学研究科 建築学専攻 修士2年)／森内帆香(建築学部 建築学科 4年)／細川誉(デザイン工学部 デザイン工学科 4年)／山岸奎祐(デザイン工学部 デザイン工学科 4年)

■プロジェクトの概要

本プロジェクトは、芝浦工業大学とUR都市機構の包括連携協定に基づき、2023年度から豊洲四丁目団地を対象に住民の孤立問題の解消とコミュニティ活性化を目指して行われているものである。

2025年度は建築学とデザイン工学の合同研究として、現地調査で得たデータをもとに3Dプリンターで住戸模型を制作し、理想のインテリアを協働で配置する「住みこなしデザイン教室」を、団地および近隣の居住者向けに全3回開催した。イベントを通して楽しい時間を共有するだけでなく、参加者が個人作業からグループ作業へと移行する中で発生する会話や関係構築の過程を記録・分析することで、多世代間交流を促進する環境構築の手法を模索し、中長期的なコミュニティ形成支援に向けた実践的な基礎知見を得た。

■地域志向(COC)活動助成プロジェクトの成果

【教育】

建築計画学(小菅瑠香研究室)とデザイン工学(山本創太研究室)の合同プロジェクトとして、学生が実社会の課題に主体的に取り組むPBL(課題解決型学習)を実践した。現地調査に基づく3D住戸モデリング技術の習得や、コミュニティ活性化の成功事例(カフェ06)での運営方式ヒアリング調査を通じ、地域特性の理解を深めた。また、UR都市機構との度重なる研究計画打合せや振り返りミーティングに参加することで、ステークホルダーとの協働プロセスを経験した。これらの活動成果は、参加学生の卒業研究や修士論文に組み込まれており、実践的な課題解決能力とコミュニケーション能力の向上に大きく寄与した。



【写真1】豊洲四丁目団地

【研究】

都市部の高経年団地において希薄化しがちな住民コミュニケーションの発生要因と形成プロセスについて、実践的なデータを得ることができた。集会室で開催した「住みこなしデザイン教室」において、参加者が団地住戸模型に「夢のインテリア」を配置するワークショップを実施した。個人作業からグループ作業への段階的な移行プロセスにおいて、団地模型というツールが媒介となって初対面同士の会話がどのように成立し、親交が深まっていくかを連続的に記録・分析した。まだ3回分と収集データ量は少ないが、これにより、世代を超えたコミュニケーションを自然に誘発する環境構築のための基礎的な知見を収集することができた。



【写真2】住戸実測調査

【社会貢献】

前述の通り、UR都市機構との連携体制のもと、実際の団地集会室を舞台に「住みこなしデザイン教室」を全3回開催し、性別や年齢を問わず近隣住民が交流できる場を直接的に提供した。インテリア配置のみでなく、教員による住宅に関する講義や、モバイル・フロアランプ等のインテリア小物を作成する体験型ワークショップを交えることで、住民の住環境に対する関心の向上に寄与した。さらに、一連のワークショップを通じて得られた成果や住民の声をまとめたポスターを作成し、団地内に掲示することで、ワークショップに参加していない住民に対しても、住環境への関心の向上や体験型ワークショップへの興味を喚起することができた。



【写真3】住みこなしワークショップ

主なピックス

■ 「カフェ06」の事例ヒアリング調査

7月8日、プロジェクトメンバーは大島六丁目団地の「カフェ06(ゼロロク)」でヒアリング調査を実施した。カフェ06はシニア世代の多い地域において、みんなが気軽に立ち寄れる居場所づくりを目指して、自治体がきっかけを作って団地内で運営されるようになったカフェである。



【写真4】 カフェ06のヒアリング



【写真5】 カフェ06の運営風景

■ 住みこなしデザイン教室 - 団地をミニチュア空間で知ろう！

住みこなしデザイン教室
- 団地をミニチュア空間で知ろう！ -

参加費無料！

いつものお部屋が、もっと好きになる。

一緒に原簿の模型を作り、壁で「理想の住みこなし方」を探して見ませんか？

イベント概要

<場所> UR豊洲団丁目地4号棟集会所
<参加対象> 小学生から高齢の方まで、どなたでも！
豊洲団丁目団地外にお住まいの方もご参加いただけます！

<開催日時>

10月26日 日曜日	11月08日 土曜日	11月16日 日曜日
10:00~11:30	14:00~15:30	10:00~11:30

(1) 世界の住みこなしについてのお話 (2) 団地模型製作 (3) ヒアリング (4) モビール製作

(1) 住宅内の暮らしについてのお話 (2) みんなの住みこなし紹介 (3) ランプ製作

And more...



【写真8】 ワークショップポスターと作業風景

各回約2時間、全3回開催した「住みこなしデザイン教室」には、毎回5~15名程度の団地内外の住民が参加した。

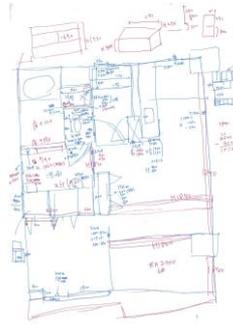
当初は知らない人ばかりで黙々と自分の作業に取り組む参加者も見受けられたが、住戸内のレイアウトワークが進んでくると、状況に変化が見られた。

住戸模型の間取りが現在の自宅と似通っているせいか、参加者は家具を配置するうちに自身の生活や家族との思い出をファシリテーターの学生に自然と語り始め、それを契機に同席する参加者間へと会話の輪が広がっていく様子が観察された。またこのようなコミュニケーションにより、「前回が面白かったから」と再参加する、いわゆるリピーターもみられた。子どもの参加者からは「魚が好きなので水槽を見ながら寝たい」といった夢あふれる作品が生まれ、模型づくりを通して多世代が和やかに交流する有意義な場となった。

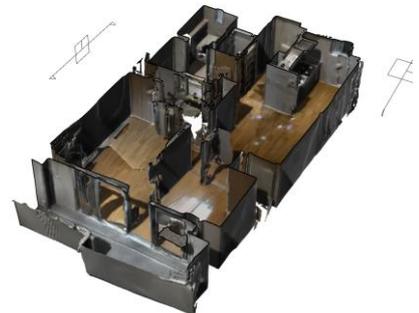
■ 団地住戸の実測調査

UR都市機構の案内のもと、学生たちは実際の団地住戸を複数訪問し、内部の実測および3Dスキャンによる現地調査を実施した。調査には専用のアプリケーションを用いたが、初めて操作する学生も多く、専門的機材を用いた実践的な技術習得の場となった。

さらに、収集したデータをもとに大学内の3Dプリンターを活用して、1/25スケールの住戸模型を制作した。この一連のプロセスを通じて、学生たちは実際の居住空間の現状を正確に把握し、取得した情報をデジタルデータとして整理・出力・活用する手法を実践的に修得することができた。



【写真6】 実測の野帳



【写真7】 フォトグラメトリを用いた計測

■ コミュニケーション発生要因の分析

今年度は全3回の開催だったため、コミュニケーション発生要因の分析としては推測の域を出ないが、本イベントが会話の促進に効果的だった理由としては、現在のところ、以下のようなことが考えられる。

- ・ 「住みこなし」という共通のテーマが与えられている
- ・ 手作業に集中しながらの会話なので気軽である
- ・ 同じ作業をすることで共感性が発生している
- ・ 住戸模型が慣れ親しんだ間取りなので、そこから回想されて自分の生活について語りやすい
- ・ 同じ状況で他者がどう住みこなしているか関心があるため、人の話に耳を傾けやすい
- ・ 多世代が集まっているため、作業が苦手な人への手助けの会話が発生する 等

本プロジェクトは次年度も継続していく予定であり、今後はサンプル数を増やして定量的な分析を試みる。



【写真9】 共同作業の距離感



【写真10】 夢のインテリア作品事例